

徹底討論「次の東海地震はどこだ!？」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科附属地震火山・防災研究センターは、1月12日(金)、野依記念学术交流館カンファレンスホールにおいて、徹底討論「次の東海地震はどこだ!？」を開催しました。

まず、第1部として、山中佳子東京大学地震研究所助手、鹿島建設株式の武村雅之氏、谷岡勇市郎北海道大学大



東南海地震の震源域について議論を行う講演者

学院理学研究院助教授、独立行政法人海洋研究開発機構の小平秀一氏、鷺谷 威環境学研究科助教授の5名の専門家から1944年に起こった東南海地震の震源域(すべり領域)がどこまで広がっているのか、に焦点をあてた最新の成果報告が行われました。報告では、1944年当時は第二次世界大戦中であったため限られた観測データしかありませんが、そのデータを最大限に活用し、他の観測データとの不一致を少しでも解消しようと努力していることなどが参加者に伝えられました。

引き続き行われた第2部では、安藤雅孝同研究科教授を交えて、地震波形、震度分布、津波波形、地殻変動、地下構造の観点から、切迫しつつある東海～東南海地震について、パネルディスカッション形式の討論会を行いました。討論会では、地震時にはどの領域で、どのようなすべりが起こりやすいのか、について議論を行い、地震の発生時間の予測に関しては、現時点では最新の科学をもってしても難しい、との説明がありました。特に、「観測やシミュレーションでは予測できないことが、自然界には多く存在する」ということを日々認識しておかなければならない、と考えさせられる非常に意義深い討論会となりました。

第25回、第26回防災アカデミーを開催

●災害対策室

第25回防災アカデミーが、12月21日(木)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。今回は、1970年代前半に南海地震をはじめとした南海トラフ巨大地震の発生モデルを世界で初めて提唱するとともに、以後30年以上、そのメカニズムの解明に取り組んできた、安藤雅孝環境学研究科教授による「南海トラフ巨大地震の残された謎」と題する講演が行われました。講演では、次の地震発生を予測する上で重要な意味を持つが、いまだ多くの謎が残されている1605年慶長地震に焦点をしぼり、その地震像をわか

りやすく紹介しました。また、日本列島の南岸沿いの場所で、2004年スマトラ沖超巨大地震のような地震が起こりうるのではないか、という話題も取り上げられ、会場は定員を超える125名の参加者でいっぱいになりました。

1月16日(火)には、第26回防災アカデミーが開催され、西澤泰彦同研究科助教授による「濃尾地震と建築物の耐震化」と題する講演が行われました。濃尾地震は名古屋にも大被害をもたらした地震で、近代的で大がかりな災害調査がなされた最初の地震でもありました。講演では、その調査から当時の建築学者たちが何を学び、どのような耐震対策を提案し普及させていったのかをわかりやすく紹介しました。特に、当時の近代建築であるレンガ作りの建物ばかりでなく、木造の建物についても多くの研究がされていたことは、防災アカデミーの常連参加者でも初めて聞いたという方が多かったようです。



講演する安藤教授



第26回防災アカデミー講演の様子